広報かがみの 5
2015年5月号 第123号 毎月1日発行

シリーズ 第60回

布施神社のお田植祭

五月五日、富の布施神社境内ではお田植祭（県指定文化財）が行われ、毎年多くの観客でにぎわいます。

稲作が生活の中心であった日本では、古来より豊作を祈願する神事としてお田植祭が行われ、現代でも全国各地の神社などで続けられています。

布施神社のお田植祭では、獅子練から始まり、境内を田んぼになぞらえて、荒起こし、代掻き、鍬代（畦塗り）、田植と、昔ながらの田植えの行程を演じていきます。

クライマックスは、殿様とその従者・福太郎が登場し、殿様が口上を述べ、中央に座ります。福太郎は椀に盛ったご飯を殿様に食べさせようとしますが、殿様は食べようとしません。苦心の末、ようやく殿様が口を開けると、福太郎はそのご飯を自らが食べ、それが喉につかえて苦しみます。こうした滑稽なやりとりが観客の笑いを誘いますが、殿様が笑うとその年は不作になると言われ、殿様は決して笑わず、拝殿に入っていきます。

このお田植祭がいつ頃から行われていたのかはわかりませんが、元禄四年（一六九一）刊『作陽誌』には、「四月五日は神田植と為す。插秧女（早乙女）二十人其の余事に関する者数十人。嘯歌して之を営む。」とありますので、この頃は「神田植」と呼ばれ、早乙女が田植えをし、周りで歌を歌うといった内容だったようです。現在、全国各地で行われているお田植祭も、このパターンが多く、平安時代に起源をもつ、踊り歌いながら田植えをする「田楽」が神事と融合して今に伝えられてきたのでしょう。

ですから現在の布施神社のお田植祭は、『作陽誌』刊行後、つまり古くても江戸時代中期以降に今のような形式になったようです。

近年、富のお田植祭について、研究者の方がそれぞれの分野から見解を述べています。民俗学研究者の今木義法氏は、鍬代の場面で農夫がタバコを吸う場面に着目し、タバコが庶民に普及したのが江戸時代頃であるということと、殿様と福太郎の場面での、ムシロで作られた通路や舞台は能舞台そのもので、殿様と福太郎の所作は、「狂言」（能楽の一種、滑稽なふるまいで笑いをとる演劇）に出てくる「田舎大名」とその従者「太郎冠者」を彷彿とさせ、狂言が庶民に人気を得る江戸時代以降にこのような祭りの形式になったと考えています。

また、歴史研究家の前原茂雄氏は、殿様の口上に着目します。殿様は、「どこの土地にどのような品種を植えるのが最適か」と指示し、福太郎に水田の水の管理を任せます。こうした農作業の管理や灌漑の保護は、鎌倉・室町時代からの荘園領主が農民に対して行う役割に似ており、江戸時代以降に演劇的に変化したものの、「富美荘」と言われた中世の荘園領主と農民の関係の名残を伝えていると考えています。

このように、独特の祭りの風景は、古い習俗を残しつつ時代の流行や風習を取り入れながら変化していったようです。近年、お田植祭の前に神社付近の水田で、昔ながらの田植え再現も行われていますが、これも「神田植」と呼ばれていた古来の神事への原点回帰の思いもあるのでしょうか。

今年は是非、こうした歴史に思いを馳せながら、お田植祭を楽しんでみて下さい。

鍬代

殿様と福太郎

昔ながらの田植え再現

参考資料：『みんなで学ぶ ふるさと美作のあゆみ』、『作陽誌』、お田植祭パンフレット、今木義法氏の調査資料

指導・協力：前原茂雄、佐古庸二

生涯学習課　日下
電話(0868)54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/